

## デカルト

### 2017 年本試

問 2 近代自然科学の成立に寄与した思想家としてデカルトがいる。彼についての説明として最も適当なものを，次の①～④のうちから一つ選べ。 30

- ① 知識の正しい獲得法として，実験や観察に基づいた個々の経験的事実から一般的な法則を導く帰納法を提唱した。
- ② 自然界に存在する生物の種は不変ではなく，より環境に適した種が自然選択(自然淘汰)によって残ってきたのだとした。
- ③ 人間の心とは，最初は何も書き込まれていない白紙のようなものであるとして，生得観念の存在を否定した。
- ④ 精神が対象を疑いの余地なく認識し，他の対象からもはっきりと区別していることを，明証的な真理の基準だとした。

問題番号	設問	解答番号	正解	配点
第 4 問	問 2	30	④	2

2016 年追試

問 2 デカルトの哲学について述べた次の文章を読み、～に入れる語句の組合せとして正しいものを、下の①～⑧のうちから一つ選べ。

『方法序説』の冒頭で「はこの世で最もよく配分されている」と述べたデカルトは、誰もがそれを正しく用いることによって、真に確実な知識を得ることができると考えた。彼は、すべてを疑った結果、疑い得ない真理として、「私は考える、ゆえに私はある」という命題に到達した。この原理を確実なものとして、そこからデカルトは他の真理を論証して導き出そうとした。このような論証の方法はと呼ばれる。

デカルトは、さらに考察を進め、精神が明晰判明に認識するものとして、物体の存在も認めたが、精神の本質が考える働きであるのに対し、物体の本質はだとした。彼によれば、身体は自ら考えることはないため、物体にほかならない。

- ① a 良識      b 帰納法      c 質料
- ② a 良識      b 帰納法      c 延長
- ③ a 良識      b 演繹法      c 質料
- ④ a 良識      b 演繹法      c 延長
- ⑤ a 悟性      b 帰納法      c 質料
- ⑥ a 悟性      b 帰納法      c 延長
- ⑦ a 悟性      b 演繹法      c 質料
- ⑧ a 悟性      b 演繹法      c 延長

問題番号	設問	解答番号	正解	配点
第 4 問	問 2	30	④	3

2015 年追試

問 1 デカルトによる真理の探究についての説明として最も適当なものを，次の①～④のうちから一つ選べ。 

29
----

- ① 精神と物体を区別したうえで，人間精神は物体の運動によって説明され得るとし，人体に関する医学的研究を行った。
- ② 精神と物体を区別したうえで，物体を精神に基づくものとし，思考する働きをもつ人間精神による認識の分析を，諸学問の基礎とした。
- ③ 感覚はしばしば私たちに欺くが，数学的な知識は感覚を超えたものであるから，疑わなくてもよいとした。
- ④ 感覚はしばしば私たちに欺くものであり，私がここにいるという感覚もまた，夢かもしれないため，疑わなければならないとした。

問題番号	設問	解答番号	正解	配点
第 4 問	問 1	29	④	2

2014 年追試

問 5 哲学の歴史では「疑うこと」が様々な役割を果たしてきたが、次のア～ウはそれらについて説明したものである。その正誤の組合せとして正しいものを、下の①～⑧のうちから一つ選べ。 

33
----

ア デカルトは、少しでも疑い得るものは虚偽としてしりぞける方法的懐疑を徹底した結果、疑っている限りの我の存在だけは確実であると考えてるに至った。そして、それを土台にして、一切の学問を築き上げようとした。

イ ヒュームは、経験論を徹底させて、人間の心は単なる「知覚の束」にすぎないと主張した。そしてそこから、実在するのは流れゆく知覚だけで、実体としての精神は存在しないという懐疑的立場を取った。

ウ カントは、人間の認識能力を検討して、「物自体」は認識できず、人間の主観によって対象は構成されると考えた。それゆえ、「存在することは知覚されること」だと主張し、物体の実在を否定する懐疑的結論に至った。

- |   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|
| ① | ア | 正 | イ | 正 | ウ | 正 |
| ② | ア | 正 | イ | 正 | ウ | 誤 |
| ③ | ア | 正 | イ | 誤 | ウ | 正 |
| ④ | ア | 正 | イ | 誤 | ウ | 誤 |
| ⑤ | ア | 誤 | イ | 正 | ウ | 正 |
| ⑥ | ア | 誤 | イ | 正 | ウ | 誤 |
| ⑦ | ア | 誤 | イ | 誤 | ウ | 正 |
| ⑧ | ア | 誤 | イ | 誤 | ウ | 誤 |

問題番号	設問	解答番号	正解	配点
第 4 問	問 5	33	②	3

2013 年追試

問 4 西洋の思想家は様々な仕方個人意志について考えてきた。そうした思想の説明として最も適切なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。 33

- ① フロイトは、生存への不合理な意志こそが世界の根源であり、個人はこうした意志を肯定することによって苦悩から脱却し得ると説いた。
- ② エラスムスは、自由意志を否定し、人間は信仰によって義とされることで罪から解放されて内的な自由をもつと主張した。
- ③ デカルトは、情念に左右されず、自由意志を用いて理性に従うことで自分自身に対する尊重が生まれると考え、それを高邁の精神と呼んだ。
- ④ スピノザは、人間が自分のことを自分で決められる自由意志をもっている点に、他の生物とは異なる人間の尊厳があると考えた。

問題番号	設問	解答番号	正解	配点
第 4 問	問 4	33	③	3

2012 年本試

問 1 デカルトの言葉として正しいものを、 次の①～④のうちから一つ選べ。

22

- ① 人間の知識と力は合一する。
- ② 事物を永遠の相のもとに観想する。
- ③ この宇宙の沈黙は私を震撼させる。
- ④ 良識はこの世で最も平等に分配されている。

問題番号	設問	解答番号	正解	配点
第 4 問	問 1	22	④	2

2012 年追試

問 2 デカルトが真理の基準とした「明晰判明」を説明したものとして最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。 23

- ① 明晰とは、事物が細かいところまで確実に分析されることであり、判明とは、事物の構造がどのようになっているか把握されることである。
- ② 明晰とは、事物が疑いようもなくはっきりと認識されることであり、判明とは、事物が他のものから紛れもなく区別されることである。
- ③ 明晰とは、事物が最も認識しやすい単純な側面から捉えられることであり、判明とは、事物に対する最も複雑な理解へと思考が総合されることである。
- ④ 明晰とは、事物の性質が余すところなく枚挙されることであり、判明とは、事物がもつそれらの性質が全体として見渡されることである。

問題番号	設問	解答番号	正解	配点
第 4 問	問 2	23	②	2

2010 年本試

問 1 文章中の 23 に入れるのに最も適当なものを、次のそれぞれの①～④のうちから一つずつ選べ。 23

デカルトは、合理論の立場から、これ以上疑い得ない根本原理から出発して 23 演繹法を重視した。

- ① 確実な推論を行う
- ② 問答を繰り返す
- ③ 対立する主張を止揚する
- ④ 観察に基づき判断する

問題番号	設問	解答番号	正解	配点
第 4 問	問 1	23	①	2



2009 年本試

問 3 デカルトは「コギト」から出発して精神を理解した。精神に関するデカルトの見解として最も適当なものを，次の①～④のうちから一つ選べ。 25

- ① 精神は，人間の根源にある欲望を統御する良心であり，教育を通じて社会の規範が内面化されたものである。
- ② 精神は，誠実なる神によって人間に与えられた良識であり，信仰に応じて各人に配分されているものである。
- ③ 精神は，思考を属性とする実体であり，延長を属性とする物体である身体から明確に区別されるものである。
- ④ 精神は，客観的な真理を追究しようとする高邁の心であり，情念との かか 関わりをもたずに存在するものである。

問題番号	設問	解答番号	正解	配点
第 4 問	問 3	25	③	3

2008 年本試

問 2 自己中心的な態度と共感的な態度とは、「他人」に対してのみならず「自然」に対しても考えられる。自然に対する人間の態度について述べた次の文章中の  ～  に入る人名の組合せとして最も適当なものを、下の①～④のうちから一つ選べ。

は、事実から法則を導き出す方法を提唱して、「自然は服従することによらなくては征服されない」と言い、また  は、精神と物体とを明確に区別しつつ、「我々を自然の所有者にして主人となしうるような実践哲学」があると言って、人間中心主義の考えから自然の支配を正当化した。これに対して、人間を工作人(ホモ・ファール)と定義する  は、「哲学者は自然を仲間として扱い、……服従も征服もせず、共感しようとする」と述べて、科学的な知性による過度の自然支配を批判した。

- ① a ベーコン    b デカルト    c ベルクソン  
② a ニュートン    b パスカル    c ホイジンガ  
③ a ベーコン    b デカルト    c ホイジンガ  
④ a ニュートン    b パスカル    c ベルクソン

問題番号	設問	解答番号	正解	配点
第 4 問	問 2	24	①	3

2006 年追試

問 2 自らの理性を頼って生きるような考え方を代表する近代の思想家とその考えについての記述として最も適当なものを，次の①～④のうちから一つ選べ。

23

- ① ルターは，教皇を頂点とするカトリック教会が信仰のみならず政治や学問の世界にも権力を発揮していることを批判した。
- ② デカルトは，真理発見のための方法的懐疑を主張し，スコラ哲学の抽象性を批判して明<sup>めい</sup>晰<sup>せき</sup>で判明な認識を重視した。
- ③ ベンサムは，各人が己の快樂を求め苦痛を避けるという人間本性の事実から，功利性に基づく道德原理を考えた。
- ④ フロイトは，欲求不満という心理的に不安定な状態を解消しようとする，無意識の防衛的作用に注目した。

問題番号	設問	解答番号	正解	配点
第 4 問	問 2	23	②	3

2004 年本試

問 1 文章中の  に入れるのに最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ  
選べ。

自由主義的社会観の原型となった社会契約説が 17 世紀以降広く受け容れられていく過程と並行するように、物質世界は機械の部品のように自然法則に従うだけの粒子から成ると考える機械論的自然観が台頭してきた。物体の本性は固さ、色、重さといった性質にではなく、延長をもつという点にある、と  は考えた。この自然観によれば、物質がもつ運動も、もともと神から与えられたものにすぎない。物質は生命も感覚ももたず、神が定めた自然法則に服従するだけである。

- ① パスカル                      ② デイドロ  
③ デカルト                      ④ モンテスキュー

問題番号	設問	解答番号	正解	配点
第 2 問	問 1	10	③	2

2003 年追試

問 4 知的な思考法を代表するものの一つに 演繹<sup>えんえき</sup>法がある。演繹法の例として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。 15

- ① 昨日いところにもらったおみやげの饅頭<sup>まんじゅう</sup>はすごくまずかった。「名物にうまいものなし」っていうけど、本当だ。
- ② 嘘<sup>うそ</sup>つきはスネオでしょ。スネオとノビタのうち一人が嘘つきで、ノビタは嘘をついていないんだから。
- ③ 猫って「お座り」しない動物だと思うよ。今まで何匹も猫を飼ったけど、どれも「お座り」しなかったもの。
- ④ 今日の昼に電話をかけたけど、彼はいなかったわ。確か明日は試験だから、きっと図書館に行ったのね。

問題番号	設問	解答番号	正解	配点
第 2 問	問 4	15	②	3

2001 年本試

問 3 デカルトの思想のうちにも近代的な意味での人間の平等や尊厳の観念が示されている。そうした彼の考えを表す記述として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。 

13
----

- ① 人間は神から自由意志を授けられた唯一の存在であり、我々は誰<sup>だれ</sup>でもその意志によって、世界における自らの使命を決定することができる。
- ② 物事を正しく判断する良識はこの世で最も公平に分け与えられているものであり、我々人間は誰でも、この能力を正しく用いて真理に到達できる。
- ③ あらゆる生物は生き続けようとする意志をもつものであり、それら生命あるものへの畏<sup>おそ</sup>敬<sup>けい</sup>の念を基礎として、我々人間の平等と尊厳もまた成り立つ。
- ④ 世界の一切は神から必然的に生じるものであり、我々人間は誰でも、理性を用いることによって世界を神との必然的な関係で認識することができる。

問題番号	設問	解答番号	正解	配点
第 2 問	問 3	13	②	3

2000 年本試

問 1 文中の 16 に入れるのに最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。 16

デカルトは、思弁的なスコラ哲学に代わる「実地的な哲学」によって、人間を「16」たらしめようと考えた。

- ① 自然の番人にして保護者      ② 自然の敵にして征服者  
③ 自然の主人にして所有者      ④ 自然の友にして理解者

問 2 デカルトによる従来の学問への批判を記述したものとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 19

- ① 従来の自然学ではさまざまな偏見によって正しい認識が妨げられてきた。だが、人間が自然を技術的に支配するためには、偏見を排し、実験や観察によって個々の経験的事実から一般的法則を発見することが必要である。
- ② 知識は人間生活から離れた不変の真理を捉えたものだとする偏見が、従来の学問を支配してきた。だが、知性は問題解決に役立つかぎりでのみ意味をもつものだから、知識は常に生活の中で試され改善されなければならない。
- ③ 哲学の仕事は世界を解釈することだという偏見に従来人々は <sup>とら</sup> われてきた。だが、大切なのは科学的認識によって世界を変えることだから、そうした実践的目的の基礎となるように哲学を作り変えなければならない。
- ④ 雄弁術や詩作は天賦の才に左右され、また従来の道徳論は徳の認識の仕方を教えない。だが、真偽を区別する理性の力は万人に平等に与えられているから、順序よく考えていけば、学問において <sup>だれ</sup> 誰でも正しい認識に達しうる。
- ⑤ 古代の学説を繰り返す、それに注釈をつけることが学問だとされてきた。だが、神は自然物を人間のために <sup>つく</sup> ったものだから、神の意図の探求を自然研究の方法と合致させることによって、学問は生活に役立つものとなる。

問題番号	設問	解答番号	正解	配点
第3問	問1	16	③	2
第3問	問2	19	④	3